

教育文体論を用いたライティング分析

日本人 EFL 学習者の母語と外国語習熟度の関連性を探る

吉田安曇・寺西雅之・西原貴之・那須雅子

1. はじめに

現在日本では、早期外国語（英語）教育の推進が加速する一方、その教育的効果に警鐘を鳴らし、母語教育との連携を求める声も多い。本研究では、母語教育と早期英語教育の効果を測定する試みとして、異なる教育背景を持つ4つのグループに対し英語課題を実施した。本発表では各グループを代表する4名の協力者の英作文を教育文体論的視点から分析し、母語教育及び早期外国語教育が外国語習熟度に与える影響について論じる。なお、本研究では、幼少期の読書を母語教育の指標として設定し、また早期英語教育は小学4年生までに英語学習を開始したものと定義する。

2. 本研究の目的

本研究の目的は、日本人 EFL (English as a Foreign Language) 学習者のライティングを文体論的視点から分析することにより母語能力と外国語習熟度との関連性について考察することであり、以下の3つの問いに対する検証を試みた。①早期外国語教育の効果とは？②幼少期の母語教育は外国語習得にどのような影響を与えるか？③EFL 学習者のライティング評価において、教育文体論は有効な手段となり得るか？

3. 先行研究

本研究に関連する先行研究は、①早期外国語教育に関する研究、②母語 (L1) と外国語 (L2) 教育の相関性に関する考察、③英語学習と文体論に関する研究、に分類される。①の代表である豊永・須藤 (2017) は、小学1・2年生で英語学習を始めた場合、中学生になってからの英語学力に正の効果をもたらす可能性を示唆している。一方、②の代表である斎藤 (2017)・大津 (2018) 等は、早期英語教育に消極的な立場を取っており、母語の確立こそが優先されるべきであると論じている。また Yoshida (2020) においても、日本人 EFL 学習者を対象にしたアンケート調査及びインタビュー分析より、日本語での読書が外国語習熟度に一定の影響を与えることが論じられている。しかし、現時点では、母語による読書が外国語学習に及ぼす影響について論じる研究は依然として少なく、さらに、早期英語教育と母語教育の優先についての議論も未だ決着がつかない。したがって、今後さらなる実証研究の積み重ねが不可欠である。

③との関連では、従来英語教授法のひとつのツールとして用いられてきた教育文体論 (pedagogical stylistics) が、文体を通して言葉に対する感性 (language awareness) を高め、主にリーディング力及びアウトプット力向上に貢献する点を論じた研究が多い (例：北 2016)。その代表例である Hanauer (2014) は、10年以上に渡り ESL 学習者によって書かれた約 1000 編の詩を収集し、第二言語学習が英語で詩を書くことの学術的意義を強調している。さらに、Fogal (2015) も、教育文体論が学術的な英語力の構築に有効であると論じている。

一方、近年、文体論を学習者の英語力の分析や評価などへ応用することが試みられており、グローバル化により実用英語に対する需要の増大が予想される中、今後さらに注目を集めるものと推測される。例えば、菊池 (2017) は、日本人 EFL 学習者による「文法的には正しいがごちない文」について指摘し、文体を意識しながらより効果的な文章を読む必要性を説いている。また、富岡 (2017) は、「柔らかい表現と堅い表現」「簡潔で無駄のない表現」「語句や文の適切な配列」等、学習者の文体を評価する際の留意点について例を挙げて解説している。これらの先行研究は、英語学習と文体論の関係を論じる上で非常に示唆深いものではあるが、分析されているサンプルの詳細が示されていない等、不十分な点も少なくない。上記の先行研究を踏まえ、本研究では、EFL 学習者によるライティングのサンプルを収集し、それらを測定・評価するツールとして文体論を新たに応用した。さらに、従来のルーブリック等の評価方法の改善を目指して教育文体論を使用することの有効性について検証し、長期的な英語学習あるいは英語運用能力の評価において文体論を応用する重要性を示す。

4. 実証研究 (エッセイライティング)

次に、本研究で実施した実験の目的と方法、及び分析結果と考察について述べる。

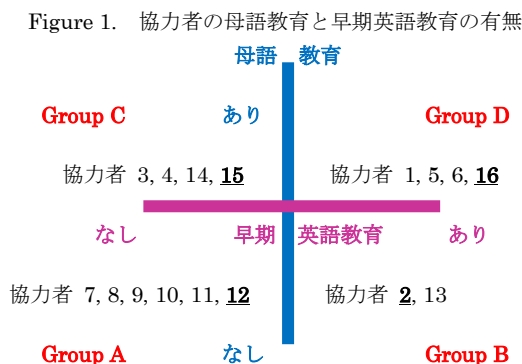
4. 1 実験の目的と方法

本研究では、英語課題として、英訳 (小説2問・論説文2問)、和訳 (小説2問・論説文2問)、及び2つのエ

ッセイライティング (What are benefits and down sides of hosting the Olympic Games? / Describe the situation in 200 years from now.) を提示したが、本稿ではエッセイの分析のみを詳細に取り上げる。なお各設問は、順序効果を排し問題への意欲のむらを制御するため、被験者ごとにランダムに配置した。また、辞書の使用は認めないが、時間制限は設けなかった。エッセイの分析では、協力者の教育背景の反映が推察される項目として、①文章の長さ、②語彙のバリエーション・レベル、文法・構文の正確さ、③コロケーションや無生物主語等の英語独自の文体、④場面に適したスタイルの選択、に焦点を当てた。分析は英語学習及び英語教育経験のある研究者（筆者）が実施し、母語教育や早期英語教育の影響が現れているかどうかの検証を試みた。実験方法は、まず、[1]主に大学生・高校生を中心とした78名にアンケート調査及び英語課題を実施、[2]課題を完全に解くことのできた16名を抽出、[3]同時に実施した教育背景等に関するアンケート結果より、母語教育及び早期英語教育の有無に基づき協力者を4つのグループに分類、[4]協力者のエッセイを文体論的視点から分析、[5]分析結果を共同研究グループで共有、最後に、[6]分析結果より、協力者の各グループの特徴等について考察した。

4. 2 分析結果と考察

本稿では、2つのエッセイのうち1つの課題 (Describe the situation in 200 years from now.) に絞り、4つのグループごとにその分析結果と考察を提示する。(協力者のグループ分けについては Figure 1 を参照のこと。)



4. 2. 1 Group A

まず初めに、Group A (母語教育・早期英語教育どちらもなし) より、協力者12番 (私立大学2年生、英検2級) の分析結果を見ていく。主張は分かりやすく読みやすいが、パッセージ全体で13文、1文当たり平均語数9.6と、文章自体も短い。また、このレベルの学習者にとっては、*smartphon* や *cultur* といった不正確なスペル等、基本的なミスが目立った。さらに、*So just owner's face faces their face, they can use.* とあるように、*face* という単語が1文で3回登場する等、同じ語の繰り返しも見られる。Group A 全体として見ても、平均語数が149.6語とパッセージが短く、また、スペルや文法のミスなども目立った。このグループには、文章を書くこと自体に慣れていないという印象を受けたが、これは幼少期の読書経験の少なさが反映されているとも考えられる。

4. 2. 2 Group B

次に、Group B (母語教育なし・早期英語教育あり) の協力者2番 (公立高校3年生、英検準2級) の分析結果であるが、一般的に難解であると言われるラテン語由来の単語 (例: *ruin, migrate*) や、*die out, wipe out* といった日本人学習者には習得が難しい熟語の使用が見られた。さらに、*This planet has water.* 等の無生物主語が効果的に使われており、この協力者が日本語を介さない英語的な発想からエッセイを書いていることが分かる。Group B の平均語数は192語であったが、このグループにはわずか2名しか所属しておらず、データとしては十分であるとは言えない。しかし、この2名には自分の意見を伝えようとする英語表現への積極性が感じられ、また無生物主語等の英語独自のスタイルの使用においては、早期英語教育の影響も考えられる。

4. 2. 3 Group C

続いて、Group C (母語教育あり・早期英語教育なし) の協力者15番 (公立大学3年生、英検1級) であるが、フォーマルな語彙を用い、正確かつ長く複雑な文章を書いている。また、文法的には正しいが、実際にはあまり用いられない表現も見られた。例えば、*so cutting-edge that...* は、コーパス (COCA) 上ではわずか7例しか

挙がっていない独特な表現である。これは文法規則の過剰一般化ともいえる一方、この協力者の独創性とも捉えられる重要な特徴であり、今後さらなる検証が必要である。さらに、二重否定（例：Not impossible）や無生物主語（例：what will wait us）といった高度な表現も効果的に使用されている。この協力者の文章応用力を考慮すると、母語での読書に支えられた言語運用能力がこの文体の一因になっている可能性がある。Group C の平均語数は 174.5 語であり、全体として母語のスキルを英語の語彙・文法等に効率良く転換させているように見受けられるが、協力者 15 番のように、文章や語彙が堅すぎてやや不自然な印象も受けることから、母語教育が英語独自の文体やより自然で慣用的な表現の使用を妨げている可能性があることも分かった。

4. 2. 4 Group D

最後に、Group D（母語教育・早期英語教育どちらもあり）より、協力者 16 番（公認会計士、TOEIC 910 点）の分析結果を述べる。simply impossible や make a change 等の表現に見られるように、日本人学習者が間違いやすい、或いはあまり用いないような自然なコロケーションが正しく使われている。英語熟達度では同レベルである Group C の 15 番とは対照的に、全体的にシンプルな語彙が使用されており、また big や for sure といった口語的表現も見られるのが特徴である。この協力者も、前述の 2 番（Group B）のように、よりイデオマティックで自然な表現が目立つことから、早期英語教育の影響が示唆されるが、さらに、文章力・論理性等には、母語での読書の影響が推察できる。また、全体としても、Group D の平均語数は 208.8 語と 4 グループで最も長く、ある程度の正確さを保ちながら自然に英語を操ることができている印象を受けた。さらに、Group C の同レベルの協力者に比べ、よりカジュアルな文体を用いることも示唆される。また、コロケーション等の英語独自のスタイルの自然な使用には、早期英語教育の影響が考えられる。

5. まとめと今後の課題

本研究の分析結果から、協力者のライティングに早期英語教育の（好）影響が見られる部分もあったが、Group A・B（母語教育なし）と C・D（母語教育あり）の結果を比較すると、母語教育で培われたメタ言語能力の積み上げによって、相乗的な学習効果が期待されるのではないかと推測される。また、日本語の熟達度の高い学習者が英語的発想で表現することが困難な場合があることが示唆された。この点については、日本語のスキルを英語に変換するためのプロセスや学習法に関するさらなる研究が必要であろう。教育文体論については、学習者によるライティングの文体を分析することで、学習背景を多面的に理解する可能性が広がり、英語運用能力向上のための効果的な学習法やフィードバックを提示できるという点において、その有効性が明らかになったのではないかと考えられる。さらには、英語を教える際、いかに文体を意識して教授していくかということも重要であると推測される。今後は、本発表で紹介できなかったエッセイ以外のライティングサンプルの分析を進め、本研究の発見や主張を検証する必要があるだろう。さらに長期的にはライティング以外の技能も含めた総合的な英語運用能力の調査・分析を通じて、早期英語教育及び母語教育の効果や問題点の検証を行い、この一連の研究における教育文体論の役割についてもさらに研究を進めていきたい。

参考文献

- ・ 大津由紀雄 (2018) 「ことばの教育としての外国語教育」『新英語教育』、第 587 号、7-9.
- ・ 菊池繁夫 (2017) 「文のスタイル」 豊田昌倫 他 (編) 『英語のスタイル』、研究社、60-70.
- ・ 北和丈 (2016) 「計算ずくの詩学: 計量的創作文体論とリメリック創作」 北和丈 他 (編) 『英語へのまなざし: 斎藤英学塾 10 周年記念論集』、ひつじ書房、295-316.
- ・ 斎藤兆史 (2017) 『めざせ達人! 英語道場』 筑摩書房.
- ・ 富岡龍明 (2017) 「英作文とスタイル」 豊田昌倫 他 (編) 『英語のスタイル』、研究社、208-222.
- ・ 豊永耕平・須藤康介 (2017) 「小学校英語教育の効果に関する研究—先行研究の問題点と実証分析の可能性」 『教育学研究』、第 84 巻第 2 号、215-227.
- ・ Hanauer, D. (2014) 'Appreciating the Beauty of Second Language Poetry Writing.' In Disney, D. (ed) *Exploring Second Language Creative Writing*. Amsterdam: John Benjamins. 11-22.
- ・ Fogal, G. G. (2015) 'Pedagogical Stylistics in Multiple Foreign Language and Second Language Contexts: A Synthesis of Empirical Research.' *Language and Literature*. 24(1). 54-72.
- ・ Yoshida, A. (2020) 'A Study on the Correlation between Reading in Japanese and English Proficiency: A Qualitative Analysis of Interviews with EFL Learners.' *JAILA Journal* 6. 2-13.